島根の記憶 ⑤

松江の大火

見渡す限り焼け野原

炎は強い西風にあおられ、一気に広がった。一九三一年五月十六日午後、松江市の松江大橋北詰にあった旅館から出火し、約十三㌶、六百戸以上を焼き尽くした。一帯はそっくり区画整理され、現在の東本町となった。

「宍道湖面が揺らぐほどの強風でねえ。飛び火に次ぐ飛び火で、見渡す限り焼け野原になりましたよ」

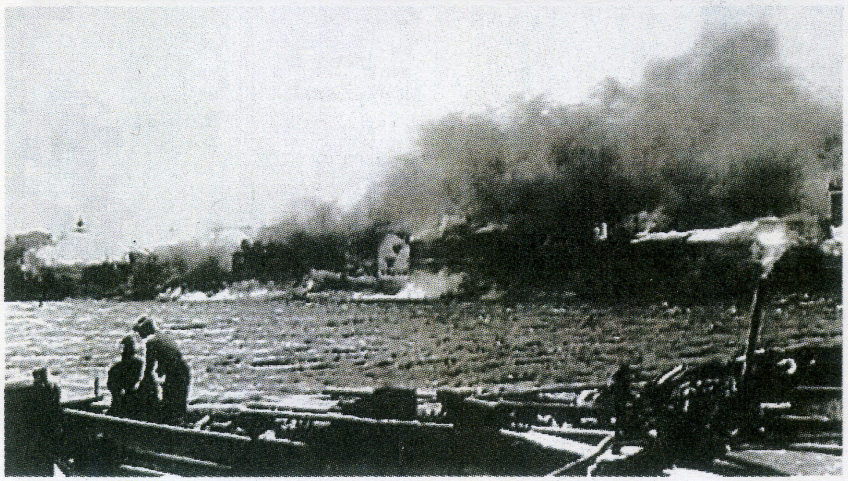
当時、旧鍛冶町（東本町四）に新居を構えたばかりで、地区の青年団長をしていた吉原延市さん(95)は、火元方面に向かって走った。既に至る所に火が回り、手の付けようがなかった。焼け出された人たちは川沿いに集まっていた。新居と所有する十数戸の借家は残らず焼けた。

城下町松江は道幅が狭く、江戸時代初めからそれまでに十三回の大火に見舞われた。この火災でも、「武者隠し」と呼ばれるジグザグの道路の先が見えなくなるほど、煙が立ち込めたにもかかわらず、幸いなことに死者が出なかった。

大橋川をはさんで、向かいからとらえた写真は、黒煙の下の混乱をうかがわせる。フリッツ・カルシュの遺物であるこの一枚と全く同じ絵柄の写真を、驚いたことに小竹原清さん(82)が持っていた。

「お年寄りの思い出話に、火事のことがよく出るんですよ。『着の身着のまま逃げた』とか、『延焼を防ぐためといって、兵隊に家を取り壊された』とかねえ。それで私も調べ始めた。写真は二十七年前、焼け出された魚屋さんからいただきましたが、おそらく誰かからもらわれたんだと思います」

吉原さん方の仏間には、火事の際、「誰かが持ち出して京橋川に浸してくれた」という杉の戸棚が残る。区画整理ですっきりした街の一角で、〝生き証人〟として現役を貫いている。



◀㊤1931年の大火。黒煙が西風にたなびいている（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）
㊦大橋川をはさんで、東本町方面を望む現在の風景